平和への第一歩

糸魚川中学校　２年４組　猪股　紗瑛

広島では多くの貴重な経験をさせていただきました。

平和記念式典では広島市長、広島県知事、総理大臣の言葉を聞きました。私が一番印象に残ったのは、こども代表の平和の誓いの言葉です。その中にこのような言葉がありました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」仲間を失った曾祖父は、そう言って自分を責めました。原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

なぜその言葉が強く印象に残ったのかというと、次の二つのエピソードがあったからです。

一つ目は広島に着いた夜に聞いた山口さんのお話です。

原爆を落とされた瞬間も大変だったけれど、その少し経った後も、家が焼け、帰るところが無くなったり、放射線の影響で髪が抜けたり、病気にかかったりと、精神的にも肉体的にも辛かったと話をされていました。また、被爆者手帳を持っているために差別されることもあり、山口さんのお母さんやお姉さんは、被爆者手帳を受け取らなかったそうです。原爆を生き抜いても、苦しみがあったことを

知りました。

　二つ目は、平和記念資料館にあった伸ちゃんの三輪車という展示物です。この三輪車の持ち主である伸ちゃんは、その日も大好きな三輪車に乗って遊んでいたそうです。しかし、家の前で被爆し、その夜苦しみながら亡くなりました。お父さんは死んでからも遊べるようにと伸ちゃんにヘルメットをかぶせ、三輪車と一緒に庭に埋葬しました。４０年後、伸ちゃんと一緒に掘り起こされた三輪車は被爆の恐ろしさを伝えるため、資料館に寄贈されました。伸ちゃんの叔父さんはその原爆の記憶について次のように話しています。「伝えたいけれども思い出したくない。でも伝えるためには思い出さないといけない。それをあえて思い出すということをしていた。」

　広島の人々が生きていくことの苦しみを背負いながらも、原爆の悲惨さを現代まで伝え続けてくれていることを知りました。私は広島に行き、そこに生きているみなさんの話を聞いたり、実際に資料を見せていただいたりして、その苦しさをひしひしと感じました。そして今を生きている私にできることは何かを考えることができました。

　平和を願う、平和を求めることは実はとても簡単で、中身のないものだと思います。なぜなら願う、求めるということは、他の人に平和を作ってもらうということになるからです。そうではなく、自分たちで平和とは何かを考え、作っていかなくてはいけないと思いました。平和の誓いの言葉の中に、そのヒントがありました。

「みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。」

まずは身近な人たちが笑顔になれるように、自分の力を使っていきたいと思います。

これが私の平和への第一歩です。